

## 『美しい女』

著者	吉田 栄治
雑誌名	日本文学誌要
巻	13
ページ	26-34
発行年	1965-10-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019133">http://hdl.handle.net/10114/00019133</a>

# 『美しい女』

吉 田 栄 治

『一日の苦勞は、その日一日だけで十分である』——これはマタイ福音書のなかの一句である。椎名麟三はよほどの句が好きらしい。いま手もとにある筑摩書房版や集英社版の『椎名麟三集』を開いてみると、いずれの本の扉にも、やや肉太で力づよい筆致で書かれたこの一句が、かかげられている。椎名麟三が、この一句に託してあらわそうとしている『心境』を、一言でいうならば、敗戦直後の人間廢墟のなかで書かれたあの『深夜の酒宴』や『重き流れの中に』といった系列の作品において吐露していた、虚無と死に堪える孤独な魂の叫び声にも似た重苦しいものがすっかり洗い落されて、なにかすがすがしい爽快な風がからだのなかを吹きぬけて行くような感じのものではなからうか。もしこの印象とびったり一致する作品をかれの作品系列からえらぶとすれば、なによりもまずあの『美しい女』の一作をあげねばなるまい。

『美しい女』に描きこめられた「熱と充実」につらぬかれた生、安定し充足した爽やかなもの、それは、これまでの作品におしつまっていた人生の重みや苦悩をぐりぬけて、ようやくたどりついた『安息』の境地といってもいいだろう。ついに来るところまで来た、

という印象をぬぐうことはできない。それは『邂逅』においてあらわれ、この『美しい女』で完成されたものである。むろんそれは長くて遠い遍歴のはてにたどりついた境地ではあるが、しかし行きどまりではなく、さらに発展されるべきものであることはいうまでもない。

処女作『深夜の酒宴』やそれにつづく『重き流れの中に』を読むと、そこでは、作者はいわば虚無の冷い壁を前にしていなおっている感じである。人間とは、けっきょく、刑を待つ死刑囚にはかならずぬ、だから人間は、この厳肅な事実をじっとみつめたまま、それに堪えるだけである、といった認識が、その姿勢の基底によこたわっているように思われた。そして作者は、この現実が重くてやりきれないけれど、その重き暗さにひたすら堪えることが人間の唯一の可能性なのだと念じているようである。そこにはまったく笑いがなく、いけぬが、それはどうにもならないからこそうかぶ笑いにすぎなかった。このように人間にとって死とは運命的必然であり、それゆえそれは人間存在を根もとからおびやかす、不安と絶望におとし入れる。だが『深夜の酒宴』や『重き流れの中に』の主人

公は、たえずこのような死と虚無におそわれ、不安におののいていたけれど、そこにはある不思議な安定がみられた。それは、いわばどうにもならないことは甘んじて受けようという守勢の自我のもつ安定といえるだろう。ところがやがてこの安定はゆるみはじめる。死がそれほど必然であるならば、むしろこちらから死をえらぼうではないか。しかしそれは自殺を意味するのではない。死の必然性を死の可能性に置きかえようというのである。それは守勢から攻勢への転換であった。そこには生にたいする熾烈な渴望がはたらいていた。長篇第一作である『永遠なる序章』には、生へのつよい渴望とともに生の確固とした根拠をあくまでもなっとくしようとする論理的な追及の鋭利な精神がはつきりと認められるのである。むろんそうした生への渴きは以前からきざしていたものである。たとえば、『重き流れの中に』の主人公が、力いっぱい生きている食堂の少女からうけた印象は、死とは関係をもたない。「少女に死があるとは思われなかった。死ぬのではないのだ。ただくだけるだけなのだ」と主人公がそういう生につよく心をうたれてこう述懐する場面はきわめて印象ぶかいものであった。自殺することで自由の確保をみいだそうとする企てでは、もはや生によせるはげしい渴きはみだされないと認識が奥の底で芽生えはじめたのである。

椎名麟三は、あるエッセーのなかで、「私のぞみは、じつに単純なものなのだ、死ぬことではなく、生々と自分の欲するものへ生きたいだけなのである」と述べている。そして、そのためにも、「死ぬことに平気な人間」になりたいのだと願っている。かれの文学の根本のモチーフの一つとして死からの自由という問題があり、かれが異常なほど死を恐怖し、だからいっそう死を怖れぬ人間にな

りたいと考えるのは、この人生における生の確実な根拠、つまり生きることの意味について、十分になっとく行くものをつかみたいと願うからにはかならない。『美しい女』にいたるかれの歩みは、そうした生きる意味についての探求のための遍歴だったといえるであらう。

『美しい女』の主人公、平凡な交通労働者にすぎない「無智で単純な無邪気な男」木村は、その平凡な日々のなかでの生の充実感についてこんなふうに述懐する——「そのとき私は、明日地球がはろぶということがはつきりしていても、今日このように電車に乗っている自分に十分であり、この十分な自分には、何か永遠なるものがある」と。また「たしかに私は、その日一日で喜んで十分だと云えるような気がしていたのだ」と——。

『美しい女』の世界がもし出す雰囲気は、あのマタイ福音書のなかの一句のもつ深い意味を日常性のなかで、平凡でありきたりの日々の生活において反芻し、その反芻のなかにじみ出て来るあたかな生の充実の感じといえるものではなからうか。それを精神の分裂のすきまから吹きこんでいた虚無の風が分裂の回復とともにしだいに遠のいて行くとき、そこにはのぼのとわきあがって来る慰めともいうことができるだろう。『美しい女』が読者の胸に送りこんで来るものは、おそらく、このような、生にたいするいいしれぬ慰めの感じなのである。考えてみれば、ここにいたるまでの椎名麟三の歩みは、マタイ福音書のなかの、あのなんでもない一句の意味の発見のためのものであったといってもよいような気がして来るのである。

「私は、日一日を十分に生きようと思う」主人公に「十分に生き

る意味をあたえ、しかもその十分さを十分に生きさせてくれる」のはあの幻のような美しい女である。毎日、ノッチをいれて電車を走らせ、エアをいれて停らせるといふ単調な労働にあげられるなかでも、さまざまな事件がおこる。非合法の共産党とかかわりをもって検挙されたり、電車が人をひき殺したり、妻に家出されたり、乗車賃をごまかして着服したり、こうした日々の生活のそのときどきに主人公木村は美しい女のことを思い描くのである。こんなありきたりの意味のない平凡な日々を生きる人間に力のあるかがやきをあたえてくれるのが、この美しい女なのである。主人公はこの美しい女と主體的な関係をもって生きていくといえる。かれはそこからあたえられている「熱と充実」を日々の生活の糧として生きていくのだ。たとえば木村が倉林きみという淫売婦を訪ねて行ったときの情景をみてみよう。これは感動的であると同時に象徴的な場面である。きみがお茶をいれようとして、あやまって足に熱湯をこぼして悲鳴をあげる。木村が薬を買ってこようかというとき、きみは投げやりな口調でこんなふうにいる。

「どうせ、死んだ身体やもん、あんたなんか知ったこっちゃあらへん！」

それをきいた木村は自分の「心が、何か恐ろしいものにかわったのを意識」せずにはいられない。すなわちかれは、このきみの態度に死と虚無を感じとったのである。木村はきみのいう「どうせ」ということばとたたかわずにはいられないのである。だからかれはそうきいたとたん、自分の足の上にもそのやかんの湯をそそがずにはいられないのだ。そのときかれの心のなかに描かれているのは「眩しい光だけで姿の見えない」美しい女なのである。また主人公が自分

の足の上にも湯をそそぐという行為は滑稽なように思えるが、しかしそうすることによってかれときみとのあいだに相互に主體的な関係がむすばれたことが確認され、そしてそのときはじめてこのふたりのあいだには「あたたかいものが流れる」のである。それからまたある日、木村はきみを海岸へ散歩につれ出す。あいかわらずきみは虚無にうちひしがれて元気がない。「うちの考えたりしていること、ほんまに、つもらへんのやねえ」とぼつんと情けない声でつぶやくきみに向かって、木村はすぐさまこう力をこめて答える。「そんなことあらへん、何でや」。ここにもやはり虚無とのたたかいがある。

この二つの情景からいえることは、虚無の力にうちのめされてあえていっている人間の心のなかに、美しい女からえている「熱と充実」が流れ、そこに生きるよろこびがわきあがって来るということである。かつての作品にあった虚無や絶望の暗い影が消え、それにかわって明るい生の輝やきがきらめいている。木村はそうした輝やかしく豊かな生を求めてけんめいになってたまたかっているのである。この小さな自分が、いまおかれているこの場所で、日々刻々を生きるに価する根拠、一日が一日でことたりるように生き、一生が生れてから死ぬまでで十分であるように生きるための唯一の保証、それをあたえてくれるのが美しい女なのである。

椎名麟三にとって美しい女とはいったいなんだろう。それは復活のイエスと考えてもいいだろう。しかしそれは苦難の十字架をへたあとの復活ではない。むしろそこからいっさいがはじまるところのものなのである。

椎名麟三がキリスト教の信仰者であることは周知の事実である。

その信仰内容には伝統的なキリスト教からすればきわめて独自なものがある。いま神と人間の問題についていうならば、人間の前に神という、いわば純粹なもの、絶対的なものがあらわれて、人間を絶対の高みへひきあげてくれるというのではなく、人間は人間を超える必要がなく人間として十分に生きさせてくれるものが神であるとかれは確信しているといつてよい。もしそうだとするならば、この世には存在しない幻想のなかの美しい女とは、神のような純粹なもの、絶対的なもののように思われるが、しかしじつは主人公をして人間として十分に生かしてくれることを保証するなものかなのである。その証拠に『美しい女』の主人公は決して人間を超えようとはしない。なるほどかれは現実のなかでいろいろと困難な状況や事態に出会うたびに、きまって美しい女の姿を思いうかべ、そのことによって生きるよろこびをあたえられるのであるが、しかしかれはその美しい女の力によってこの世の不幸や苦悩からすっかり救済されはしないし、またされようと欲しはしない。

ある絶対の力にすがりついて救われるということはすなわち人間が人間を超えることである。この超人間的なもの、絶対的なものこそ『美しい女』の主人公がもっとも嫌悪し拒否するものである。だからかれは美しい女からあたえられる生きるよろこびも決して絶対化しない。よろこびをいささかの「悲哀」をもって保留するのである。かれはこう述べている。「私は、監督から認められようと思つたことは一度もなく、ただ満二十歳になったら運転手になりたいと思ひ、また運転手になろうと思つている自分を、いささかの悲哀をもつてだが、喜んでゐる人間だったということである。私の喜びに對するこのいささかの悲哀という保留は、勿論私の美しい女に關し

ている」と。

『美しい女』において椎名麟三が提起しているのは、一口でいえば、日常性の価値の発見という問題である。それは、いいかえるならば、人間が人間を超える必要のないところで、もっとも人間らしく生き生きと生きて行くという問題である。この主人公のたたかいとは、平凡でとるにたらない日常のなかにかがやかしい生命力を確保するというたたかいである。この平凡な主人公は、この手記を書いた意図についてこう語っている。――私は、私のように「嘲笑に値する人間」「社会や歴史の表面にうかぶこともなく消えて行く人間」が「心の底で求めているのではないかと思われるものを示したいのだ。卑屈や臆病や奴隷根性などの、滑稽な着物を着せられているが、その下でひそかに生きている私たちの身体を示したいのだ」と。

しかしそれは、単なる平凡のなかにある価値や偉大さの再発見にとどまるものではない。人間の日常生活のなかにある平凡なもの、卑小なものにも、人間にとってかがやかしい価値があるのだという考えが意味をもっているのは、その底に、人間が人間を超える必要がない人間として十分に生きたいという、つまり豊かな人間として生き生きと生きたいという願ひがあるからである。人間が人間を超える必要のない人間として十分に生きるには、平凡でありきたりな日常のなかにかがやきをあたえることが必要なのだ。この主人公はこの手記のむすびのところで自分のそうした思想についてこう述べている。

「私は、いまでも、この世の一切のきちがいめいたもの、悪魔めいたものへ対立する平凡さへ、それとたたかいうる光と熱を

与えてやりたいと願っている。個人的なものであれ、社会的なものであれ、異常なものはない。もうごめん」

異常なもの、超人間的なものに對置された光と熱をあたられた平凡さとは、かがやかしい日常という意味である。それはいわば「日々の実存」とでもいうべき、なんら特別の日ではなく、この名もない一日の晴れ着ではない、ふだん着の実存のことである。「昔よりも、未来よりも好きなこの現在」、この今、そしてまた「ほかのどこかではなく、この場所で生きて行くことである。そしてこのようなかたがやかしい日常からみれば、この世のなかにある絶對的なもの、過度なもの、超人間的なものは、すべて人生にとって余分なものなのだ。女房の克枝は、「お前には過ぎもんや」と人からからかわれるほどの氣丈なところのある女性なのだが、出世の意欲もなく、十年一日のごとくただ働いている主人公の「無氣力」がいやでたまらない、「うち、あんたみたいな無氣力とちがいまんねん！」と克枝はいらだてでどなる。それにたいして木村は激しく答える。

「氣力のおきどころがちがうだけなんや！ え、七年間もやな、氣力のない人間が、ちゃんと一日も遅刻せずに働いてこられると思うとんのか。休んだのは警察にやられた四日だけやないか」  
「そやさかいに、あんたは無氣力やというんやわ。働くだけやったら蟻やっつて働いてまっしやおまへんか。阿呆らしい」  
「蟻に、働くの喜べるか？」

このやりとりを通じて木村は、自分たちの結婚が誤解から生れたことをあらためて感じるのである。が、その誤解を正すことは克枝と別れることではないと考えるのである。なぜならばかれは「誤解から、その暴力を奪ってその意味を失わせることが出来ることを信

じて」いるからである。いうなれば誤解というものは、人生にはいたるところにあるものだ。だが、誤解を絶對のものとしなないかぎり、誤解しあうものどうしとしての別の了解もあるはずだ。だから人生にはいろいろと誤解があるけれど、ほんとうの誤解というものはないのだ、とかかれは考える。「誤解から意味を失わせる」とか、「私は自分の人生に対してせい一杯の要求をしたことはない。人生に息ができるようにこちらからゆるめてやる」とか主人公がいうのは、ある絶對化されたことがらを、相対化するということであろう。主人公が、自分の「無氣力」をむしろ誇りにさえ思っているのも、そうした物事を絶對化することを心の底から拒否しているからであり、ということとは、そうした物事を絶對化するのはちがった別の生き方もありうることを確信しているということである。またほんとうの誤解がないように、この人生にはほんとうの愛も、ほんとうの自分もない——とこの主人公はいう。だから木村は、ひろ子から「ほんまに好きやといつて！」とたたみかけるようにせまられたとき、ただ黙って答えない。そしてひろ子が泣くような声をふりしぼって「やっぱりあかんの？ やっぱりほんまはあかんの？」といったとき、かれはかの女の口まねをして「そう、や」と一言答えただけである。木村には愛することはできるが、ほんとうに愛することはできない。またかれは自分についてこういつている。「なるほど自分は一度だってほんとうの自分であったことはない。だがほんとうではない自分としてでは、検挙前も検挙後も私は相もかわらない同じ自分である」と。

『美しい女』の主人公は、このほんとうのものの、絶對的なものの、そして物事を絶對化せずにはおられない人間の精神とたたかうので

ある。かれが女房の克枝と争うのもかの女のもっている「絶対主義」でもいえる過度」にたいしてである。この主人公は確信をもってこういつている。「私が、いまでも責任をもって確信することの出来るのは、この世のなかには、唯一絶対の、だからほんとうのものなんかありはしないということである」。そしてかれがこう信じかつそうした絶対とたたかうのは「過度というものに於て、人間がそのいい意図にかかわらず人間性を超えて悪魔の顔になる」からである。

人間の精神には絶対的なものにいたらなくては承知できない傾向がある。しかし、絶対的なものとはもともと人間を超えた存在であり、だから人間においては存在しないものなのである。ないにもかかわらず人間の精神はその絶対へあこがれる。しかし、もし絶対が、人間の存在に介入し、この人生に位置を占めれば、そこに人間の非人間化が行なわれる。もし人間が、かぎりなく絶対的なものを追い求めて行くならば、人生において根本的な違和感が生れ、そこに殺気、暴力、狂気めいたものがただよいはじめることになる。それはみんな死と虚無から来ているのである。だからそれは、この人生において余分なものなのだ。——『美しい女』の主人公がたたかうのは、こうした人生にとって余分なものにたいしてである。

考えてみると、人間の生き方としてある思想や信条にたいしてひたすら忠実に生き、またそのために生命を賭けさえしたり、あるいは生き方そのものにおいてつねに純粹であろうとする人間は少くない。絶対的な価値に情熱をふるいたたせて生きて行く生き方は、たしかに純粹であり、崇高なかがやきをもっていることは疑えない。しかしそれが絶対化されるとき、他人にたいして不寛容な生き方と

なることもまた事実である。妻の克枝の出世主義はそうした絶対的な生き方がひきおこす人間の非人間化の一つのタイプであろう。かの女の生き方は、その生を賭けうると信じた一つの価値に情熱をそいで行くという点で純粹なものといえる。しかしその純粹さが、人間の精神を超えて絶対化されたり、絶対的なものとむすびついて権威をもつとき、人間にたいしてそれは堅い束縛となる。またこの小説の背景となっている戦争下の現実が一つの絶対的価値にすべての国民の生命を賭けさせた暗黒の時代であったように、この絶対主義は、ヒューマニスティックな要素をことごとく踏みじって人間を死にさえ追いやるものなのだ。

このような絶対主義は、なにもかつての軍国主義だけのものではなく、進歩的といわれる運動においても思想のドグマ化や権威主義といった形であらわれて、運動そのものの発展を内部から阻害し、そこに参加した人びとの多くを傷つけていったことはあきらかな事実である。

椎名麟三は、この絶対にあこがれる人間の精神や、絶対的なものを求める純粹な生き方が生み出す、身ぶるいせざるをえないような殺気、暴力、狂気めいたものを告発し、糾問するのである。そこには、ひたすら純粹であろうとして絶対を志向する人間の生き方や精神が、ついには人間らしさや人間的なものの破壊へいたらざるをえないということにたいする、一貫した痛烈な抗議がある。そしてこの抗議は人間の自由や豊かな生き方という問題を考える上できわめて重要な意味を投げかけているといえる。

この平凡で単純で無邪気な男、木村の生き方やその生き方の根もとにある考え方は、絶対を求め純粹に生きようとするもろもろさま

さまざまな生き方にたいする反措定として意味をもっているといえる。

かれの生き方をみると、純粹に一つのものを求めて生きているのではないことは明白である。それは、なんとなく生きて来たといつてよいだろう。しかしそれは消極的な受身の生き方かというところ決してそうではないのである。

一見して無氣力に見えるかれの生き方の底の奥に、じつは生き生きと生きたいという積極的な情熱が流れていることを見逃してはならない。その情熱は、毎日、電車を運転するという単調な労働そのものからわきあがって来る、生きる喜びにささえられているのである。かれにとって生きることは、すなわち働くことであり、その意味で労働と生とは直結している。そこにかれの人生の確固とした根拠がある。人生の確固とした根拠を労働に見出すというこの考えは、キルケゴールが措定した「倫理的人間観」の労働を人間の義務とする思想の椎名流の展開とみることができよう。キルケゴールが労働こそが人間の生きることの証であり、普通人間的なものの表現であると規定した思想と、『美しい女』の主人公が電車を走らせることによって与えられた生きる喜びはいかなる力をもつても奪い取ることとはできないと確信していることとは根本において共通しているといえる。

しかし、かれはその喜びを絶対化しない。かれは労働を愛しながら、しかしそこに本当の自分があるとは信じていない。もしかかれがそこに本当の自分があると信じ、またそこに自分のすべてを賭けうる価値を発見していたならば、かれの生き方は妻の克枝の出世主義とかわらぬものとなっていただろう。克枝の出世主義は、そこにしか自分の生き甲斐はないと信じ、またそう信じている自分が本当の

自分であると信じるところから生れて来たものなのだ。そしてそうした生き方をささえているものは、時代の流れであり、それをうごかしている権力なのである。克枝の生き方は一つの価値を求める点で一重の構造といえる。それに反して木村の生き方（同時に思考のし方）は、二重の構造をもっている。かれは現実の中で、一方をえらび他方を捨てるといふ生き方をしない。また両方ともに大切だという立場にもたたない。それは、つねに他方にたいしても、それを否定する一歩手前で、その否定を保留するという態度である。克枝のような観点にたてば、木村のこのような生き方は、全く無氣力にみえるのは当然だ。しかし木村が無氣力だと非難されても、むしろその無氣力であることを誇りにさえ思っているのは、物事を絶対化するのではなく、逆に絶対化されたものを相対化するという二重性こそが、もっとも人間を人間らしく生かしてくれることを確信しているからである。

この無氣力だと人から見られている男が、絶対主義にたいしてきわめて強固な反抗を試みるのは、注目すべきことだ。軍国主義の支配が重苦しくのしかかって来る時代に対しても、懸命にたたかうのである。そのたたかいは、あの牢獄で十八年間を送ったもののたたかいとはちがう。だがこの無氣力な男は、兵役につくの拒むために、絶食をし、タバコを煎じて飲むという行為をも敢えてした。また、天皇の写真の裏にへのへのもへじと落書きをして神棚にかざっているのである。この、絶対的な権威の象徴である天皇の写真の裏にへのへのもへじと落書きしたところに、この木村の絶対的なものを相対化せざるにいられないという思考の構造が、ずばりとあらわれている。この絶対主義にたいする「拒否」は、あの獄中十八年の闘



士たちのたたかいのように肩肘はったものではないが、それに劣らぬ強固な反抗といえる。獄中十八年のたたかいは、自分の思想を絶対的なものとして、きっぱりと敵と対立するものである。したがって、そのたたかいは熾烈をきわめ、かつ純粹なたたかいである。しかしそれだけに、そのたたかいはやせたたたかいとならざるをえない。この熾烈でかつ純粹なたたかいは、いわば嵐の吹きすさぶなかで葉を吹きとばされ、枝をへし折られながらもなおかつ大地に屹立している一本の樹木にたとえられよう。その姿は崇高で見る人に感動をしいるものだ。ところがこの木村のたたかいは、いわば吹き荒れる嵐に吹き流されながらもしつかりと地面にへばりついている草むらのようなものといえるだろう。嵐に敢然として立ち向って行くのではないが、吹き狂う強風になびきながらも決して吹きとばされたり、へし折られたりすることのない草むらのようなたたかいは、つまり生活するものが、その生活の場でたたかうということである。もちろんそのたたかいは、あの獄中十八年のたたかいのようにその純粹さや絶対的な正しさによって人に感動をあたえるものではないが、それは人間の労働と生活を基盤としているものである。だからそれだけに豊かな内容と強固さとをもちうるものなのである。またそれは純粹さや絶対的な正しさを誇示することのないものであるから、獄中十八年のたたかいのように絶対化されることもないのである。またこの小説のなかには、私鉄で働く労働者の茶わんをムクとか、無欠とかいったサボタージュの様子が描かれているが、当時のことばで「非国民」とよばれるこのような労働者の行為は絶対主義が生み出す虚無をあきらかに示すものであると同時に、そこに絶対主義にたいする権力をもたぬもののせい一杯の「拒否」

があることを見落してはならないだろう。茶わんをムクとか、無欠とかいうことが、戦争にたいする「抵抗」だったというのではない。それは「抵抗」というほど肩肘はったたたかいではなかったけれど、毎日、電車を運転している、ありきたりで平凡な日常のなかでのつらい労働に自分の生命をすりへらしているもののみが、よくたたかうたたかいなのである。

「私は、毎日、いつものように働きはじめていた。その私は、あの高級な苦悩だとか遠大な理想だとか高邁な精神などというものから見れば笑うべき男であるだろう。だが、私は泊りで、終点の駅の二階で寝るときに蚤で苦しむ苦しみも、千年の未来ではなく今夜のおかずを思い描く楽しみも、死から常に逃げ回る臆病な精神も、高尚なすべてのものと同様に尊敬されるべきねうちがあると思うのだ。もしそれらの高尚なものがきっかり一米の高さがあるならば、笑われるものも、一米五〇ではなく、また〇・九米でもなく、きっかり一米の高さがあると思うのである。そして私は、それで十分であることを知っているのである。だが、高尚なものは、このような十分さを知らないのが常なのだ」

この主人公の立っている場所こそは、人間の実存と、人間の労働とが共存しうるところといえよう。そして、殺気や暴力や狂気めいた、もろもろの人間性を破壊するものから人間性をまもるとりでが築かれるのは、このような場所なのであろう。平凡なもの、卑小なもの、とさげすまれていて、力をもたない弱者にも、自己を主張したり、生き生きと生きたいというのぞみを実現して行く権利はある。そして純粹で苛烈な生き方と同等の、あるいはそれ以上の価値をそ

れがもちうる地盤は、人間の実存と人間の労働とが真に共存している、日々の生活の場の広さと深さのなかに求められるのである。この日常にかがやかしい生命を与えているのは、人間の生きるための労働であり、それはまた、人間の实存をより豊かなものに行っているのだ。たぶん、一日が一日で十分である世界とは、このような生活の場をさしているのだろう。復活のイエスの意味について、死んだイエスは、いまも死につづけており、その死んだイエスは同時に、いまも生きている、この同時性が復活なのだ、と椎名麟三は述べているが、死と生という、この矛盾し対立するものの同時性、つまり共存不可能なものを共存可能とさせるところの真の生命のかがやきをそこに発見したのである。また、このようにイエスの死を正当化するのでなく、死をあくまでも生との関連のなかで考えて行くところから、あの相対化するという思考の二重性が生れて来ていることはもちろん、それが『邂逅』以後のかれの作中にただよいはじめたユーモアの根拠となっていることはいうまでもない。ユーモアというものはつねに絶対化されたことがらを相対化するところにあるものなのだ。

『美しい女』の日常性をたしかな手ごたえあるものとしている背後には、下積みの庶民の生活を知悉したものののみがもちうる実感が大きく働いていることは否定できない。しかしそのことは、この小説が実感主義によってリアリティを確保しているという意味ではない。『美しい女』にかぎらず、椎名麟三の作品には、きまって庶民層の人間らしい人間が登場しているが、こうした庶民層の人間が、別の角度から光を当てられて、反人間的人間とでもいうべき姿で描かれている点に注意する必要があると思う。このことは、素朴な実感とか気分とかいった契機をしりぞけて、あくまでも人間を純粹に客観的に把握しようとする、作家の態度のあらわれである。椎名麟三にとって、つねに追及されるべきものは、確固とした生の根拠なのである。だから、実感とか気分とかいったきわめて不安定なものにたよるのではなく、そこには、鋭利な論理的追及の意志がたらぬかれねばならないのである。『美しい女』における追及の姿勢のなかに、この強固な意志はつらぬかれていたのである。そこからまた、『美しい女』の生にたいするゆるぎない確信も生れて来ているのだ。

(三八年三月 大学院修士課程修了)